



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博物館主要機能の「結合」について：日本における理論の歴史
Author(s)	田中, 嘉寛
Citation	日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要, 30, 29-38
Issue Date	2026-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100345
Type	journal article
File Information	JMMA_30_2026.pdf



博物館主要機能の「結合」について

～日本における理論の歴史～

About combining the primary museum functions

Its theoretical history in Japan

田中嘉寛*1

Yoshihiro TANAKA

和文要旨

「博物館の主要機能同士は結合させることで効果的に博物館活動を展開できる」という認識や記述はいつから始まり、どのような変遷があったのか？このような疑問に答えるため本稿では、文献調査によって、日本における博物館主要機能同士の結合に関する理論史をまとめた。先行研究を主要機能同士の関係に基づいて「対立・個別」「流れ」「相互作用」の3つに分類した。結果、博物館主要機能同士の結合のルーツはGoode (1895)にあり、木場 (1946) によって日本に紹介されたこと、鶴田 (1956) は「流れ」と「相互作用」の両方で捉える考え方を提示し、その後1970年代は「流れ」、1990年代以降は「相互作用」が強調されるようになったことを明らかにした。博物館活動の実践を考える際「流れ」と「相互作用」両方の捉え方を兼備することが効果的な活動展開に繋がると考察した。博物館の波及力を高めるには「流れ」が、機能結合の機会を増やし魅力を高めるには「相互作用」がそれぞれメリットをもたらすためである。

Abstract

This study traces the history of combining the primary museum functions (research, collection management, communication) in Japan. Theories are classified as "conflict/individual" "flow" and "interaction" of the primary museum functions. The root of combining the main museum function is Goode (1895) and introduced in Japan by Koba (1946). Later, Tsuruta (1956) introduced both "flow" and "interaction". "Flow" was emphasized in the 1970s; "interaction" prevailed from the 1990s. Effective museum practice requires both: "flow" boosts the ripple effect and "interaction" increases appeal by maximizing combination chances.

1. はじめに

まず、本稿では「研究」「資料活動」「交流活動」といった博物館機能を「博物館主要機能」と呼ぶ。これまでの博物館学の教科書においては、博物館の「基本的」機能や「基礎的」機能といった紹介が多かった。博物館主要機能は、英語圏の文献では the primary functions とか essential function と表現されることがある (primary はもっとも重要な、初級の、最初のといった意味がある)。しかし、基本機能という呼称は、読み手に「初歩で安易に実行できる」という印象を与える恐れがある。筆者は「研究」「資料活動」「交流活動」を必要不可欠な博物館機能であることを強調したい。そのため、本研究では以

下、博物館の機能に関しては基礎や基本ではなく、重要で中心的なという意味で「主要」という語を含めて先行研究によって使われている用語である「博物館主要機能」という語を用いる¹⁻⁴⁾。

博物館の主要機能同士は結合させることで効果的に博物館活動を展開できることは、現代においては広く受け入れられているようだ。資料を収集し、整理し、研究し、その成果を展示など交流活動で発信していくという方法は、博物館学の教科書でしばしば示される考え方である⁵⁻⁸⁾。しかし「博物館の主要機能同士は結合させることで効果的に博物館活動を展開できる」という認識や記述はいつから始まり、どのような変遷があったのか？このような疑問に答えるような学説史は多くない。博物館学の教科

*1 札幌市博物館活動センター 学芸員

書『新編博物館概論』を出版し日本博物館学会会長であった鷹野光行氏による『博物館の機能再考』⁹⁾と題された論考では、半世紀近く過去にまで遡って、博物館がもつ機能についての先行研究をまとめているが、筆者が興味とする博物館主要機能同士の「結合」に注目したものはなかった。考古学を専門とする橘昌信氏による『博物館における研究活動』¹⁰⁾と題された論考では、博物館主要機能同士を結合させる理論について先行研究の図を紹介し、自らも図を提示したが、理論構築の歴史については触れられていなかった。

筆者は現場の学芸員として10年、自然史系や古生物系の博物館で勤務し、実践をとおして博物館主要機能同士の結合がいかに強力に重要であるか実感するとともに⁴⁾、上記のような疑問と興味を持ったが、直接答えてくれる先行研究は見つけられなかった。

2. 目的

「博物館の主要機能同士は結合させることで効果的に博物館活動を展開できる」という認識や記述はいつから始まったのか、またどのような博物館主要機能同士の捉え方があり、それが変遷してきたのか？この疑問に答えることを目的とし、博物館学の歴史の中でどのように博物館の主要機能を結合させる理論が作られてきたのか明らかにするとともに、今後、博物館主要機能同士の関係をどのように捉えることで、より博物館主要機能同士を結合させ、より効果的に博物館活動を展開できるのか考察する。

3. 手法

本研究は文献調査であり博物館機能同士の関係性について示された理論を可能な限り集め、博物館の主要機能の捉え方に基づき次のように3つに分類した。博物館の主要機能同士を(1)「対立」や「個別」と捉え、結合として捉えないもの、(2)「流れ」と捉えるもの、そして(3)「相互作用」と捉えるものである。博物館主要機能を「流れ」として捉える考え方は、例えば「資料」を収集し、「研究」し、展示や解説書などで「交流活動」を行うといった時系列で表せるようなものである。「相互作用」として捉える考え方は、後述するが、それぞれの博物館主要機能が相互に関わりあっているという捉え方である。

博物館の主要機能同士の関係を図示している先行研究はいくつかあり、理解を深める上で大変有用であるが、その一方で読解の難しさもあることがわかったため、図

示の難しさと有用性について述べ、以下紹介していく図を読み解く上での筆者の姿勢を明らかにしたい。図示の難しさを感じるのは、何を意図して示しているのかわからずテキストを合わせて読んでも関連部分を見出せない場合があるためである。図中の一つの矢印が何を意味しているのか、図の上下や左右といった位置関係が何を意味しているのか、といったことが説明されないことも多い。その理由は様々であろうが、紙幅の制限は理由として考えられる。なぜなら、博物館主要機能同士の議論は、博物館概論の中か博物館機能の各論のなかの研究の項目で扱われることが多く、図とテキストが1、2ページといったごく短い紙幅に納められることが多いためであろう。一方で、図は抽象的だったり複雑だったりする事柄を視覚化する過程を経て、頭の中にある事例や思考を書き出すことで整理される利点がある。また、同じ著者による同じコンセプトの図であっても出版年の前後によって書き改められていくことが確認でき、同一著者の考えの変化も理解することができる利点がある。

4. 結果

博物館の主要機能同士の関係性に触れたり、図示した出版物を可能な限り集めて表1のようにまとめた。ここからは博物館主要機能同士の捉え方と発表年代に基づき、重要なものに絞ってまとめる。

4-1. 「対立や個別」と捉え、結合を考えない立場

まずは、博物館の主要機能を結合と捉えず「対立」「個別」と捉える考え方である。博物館主要機能をあえて「結合させないほうが良い」と主張する論者はいない。しかし、先行研究のなかには博物館の主要機能同士は「対立概念ではない」とあえて主張するものがある。例えば、大阪市立自然史博物館の館長であった千地万造氏は、博物館は社会教育施設であるため、研究するべきではないという考えがあるが、調査研究、収集・保管、展示・教育を各個別々の互いに手間ひまを奪い合う相反する仕事として理解するのではなく、互いに深くかわり合い、その総和として博物館が社会的に機能するというものである、と主張した¹¹⁾。

また、倉田と矢島¹²⁾は博物館の主要機能を「個別」に捉えアンバランスにならないよう戒めている。たとえば「収集・保存」「調査・研究」「展示・教育」の3つの要素を有機的に見ていないために、アンバランスな活動をしている博物館がある、また博物館機能を構成する個々の要素を独立した単位として見るため「現在のよう

	タイトル	図	博物館主要機能同士の捉え方
棚橋 1930	目に訴へる教育機関	-	-
Burns 1940	Field manual for museums	有	流れ
木場 1946	新しい博物館—その機能と教育活動—	有、Burns (1940) を翻訳	流れ
鶴田 1956	博物館学総論	有	流れ / 相互作用
千地 1964	研究機関としての自然史科学博物館	-	対立と捉えるのはやめよう
加藤 1977、1980、1997b、2000a	博物館学序論、わが国の博物館の概観と設立状況、博物館ハンドブック、博物館機能論	有	流れ / 相互作用
千地 1978	博物館学講座 5 調査・研究と資料の収集	有	流れ
後藤 1978	博物館概論	有	流れ
新井 1979	博物館学講座 1 博物館学総論	有 鶴田 (1956) と独自の図を併記	相互作用？
倉田 1979；倉田・矢島 1997	博物館学、新編博物館学	有	流れ
橘 1985	博物館学概説	有	流れ（研究を中心とした成果の還元）
小原 1997	博物館資料論		相互作用
大堀 1997、1999	博物館概論、博物館経営論	有	相互作用
千地 1998	自然史博物館 人と自然の共生をめざして	有	相互作用
石田 2000	博物館資料調査研究法	有	相互作用
原田 2002	概説博物館学 第 1 章博物館学概論	有	流れ
金山 2003	博物館学入門 地域博物館学の提唱	有、鶴田 (1956) を引用	流れ / 相互作用
布谷 2004、2005	利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究 博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学	-	相互作用
国立歴史民俗博物館 2007	歴博のめざすもの	有	相互作用
田中 2019	クジラを研究して発信する博物館	有	流れ
田中ほか 2024	北海道で近年新種になった鯨類化石について—文化資産をもちいて好循環を生みだす—	有	相互作用
田中・湯浅 2025	博物館における研究、資料収集保管、教育普及の有機的連携が示す可能性—大阪市立自然史博物館における 7 年間の実践として—	有	流れ / 相互作用

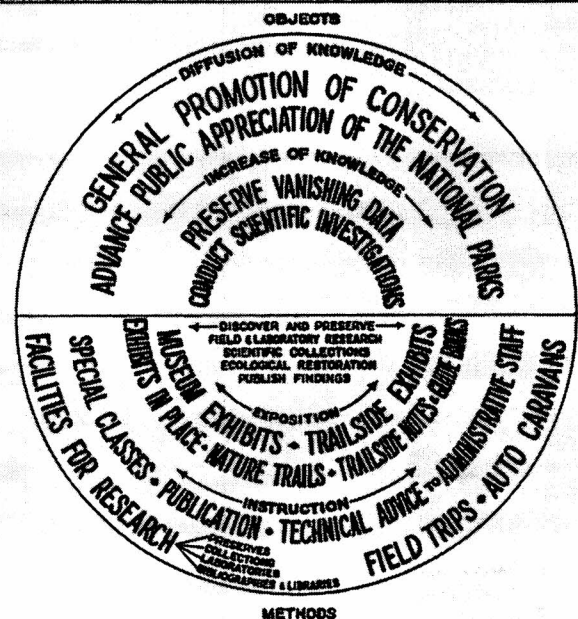
表 1 博物館の主要機能同士の関係性に触れたり、図示した出版物の一例。

な^{はこう}跛行的な博物館が発生している」と指摘していることは重要であろう。跛行は日常的に用いる単語ではないが、複数の物事がつりあいのとれない状態のまま進行することを意味している¹³⁾。

4-2. 「流れ」と捉えた 1890 - 1940 年代

木場¹⁴⁾は Burns¹⁵⁾の図を翻訳して発表した(図 1、2)。それら以前にも、博物館において研究した成果を交流活動で発信する旨は棚橋源太郎によって述べられているが¹⁶⁾、その研究成果の発信の主な受取手は研究者であり、彼らの研究に資する資料を整理することを想定していた。Burns¹⁵⁾および木場¹⁴⁾の図は、博物館の主要機能同士の関係性をはっきりと示しているわけではない。しかし、博物館の主要機能について、日本語でもっとも古く図示して発表したのは木場¹⁴⁾であろうと筆者は考えている。

FUNCTIONS AND METHODS IN NATIONAL PARK INTERPRETATIVE WORK

図 1 博物館機能と方法の概念図。Burns¹⁵⁾より転載。

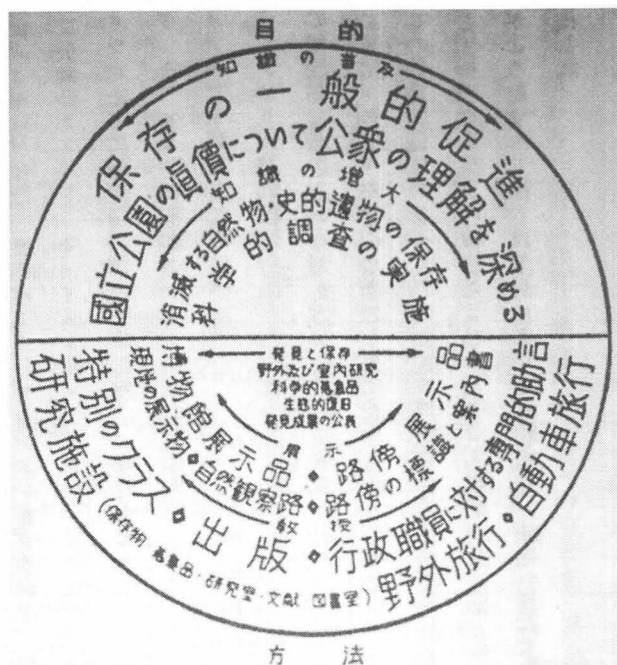


図2 博物館機能と方法の概念図。木場¹⁴⁾より転載。

その図の元になった Ned J. Burns 氏 (1899-1953 年) は 1940 年に『Field Manual for Museums (博物館のための野外マニュアル)』を出版したとき National Park Service の Museum Division の Chief であり、それ以前は the American Museum や Museum of the City of New York で Chief of Preparation として勤務するなど博物館勤務が長い人物であるようだ¹⁷⁾。

Burns¹⁵⁾ はアメリカの国立公園の野外博物館について博物館計画、展示や施設、収蔵施設、資料、実践的な技術論、図書、経営など広く論じており、第 1 章は「国立公園における博物館の役割」として博物館の機能や歴史や現状について紹介している。

博物館の機能については以下のように記している。

他の博物館と同じ機能を持っているが、公園博物館は特別な性質の機能をもっている。博物館の機能は独立した自給自足の機構ではなく、大きなガイドプログラムの中の単位である。(筆者訳)

Burns¹⁵⁾ の述べた博物館の機能同士が「独立」ではなく関係し合っている、という捉え方は日本の博物館学の機能論においても述べられるようになっている^{12,14,18)}。

Burns¹⁵⁾ の図をみると、多くの要素が描かれている。下半分は「機能 function」であり(木場は方法と訳した)、上は機能ごとの「目的」を対比させるように描いている。博物館の主要機能である「資料」の収集・保管や「研究」は円の中央下に、そして「交流活動」に含まれる展

示やイベントは「資料」や「研究」の外側に描かれている。Burns¹⁵⁾ は獲得、増大、普及といった知識の「流れ」に基づいて、博物館の機能と方法の図を作ったようだ。その考えの源流は Burns(1940) が第 1 章「国立公園における博物館の役割」の冒頭で引用した George Brown Goode¹⁹⁾ による博物館の定義まで遡ることができる。その定義は以下のとおりで、保存して利活用、発信するという、用いている用語は異なり、研究という機能が含まれているのかどうか判断できないが、博物館の機能を時間の前後関係という「流れ」として捉えていることがうかがえる。

博物館とは、自然現象や人類の業績をもっともよく示す物体を保存し、それらを利活用することで、人々の知識を増やし文化と啓蒙のための機関である(筆者訳)

Goode は利活用についてどのようなことを想定していたのだろうか。Goode¹⁹⁾ では博物館員について「それぞれの博物館員はなにがしかの専門分野の専門家になるべきであり、研究する時間と結果を出版する機会を持つべきである：著者訳」と述べており博物館における研究の重要性が強調されている。

木場一夫氏 (1904-1981) は動物学を学び、1939 年に満州国立中央博物館の学芸官となって以来、博物館の世界に身を投じ、欧米各国や国内の博物館調査を行なった経験を元に『新しい博物館—その機能と教育活動—』を 1946 年に出版した²⁰⁾。

木場¹⁴⁾ は Burns¹⁵⁾ だけでなくアメリカ国立自然史博物館や大英自然史博物館を例に出しつつ、自然史博物館においては「資料収集保存」「研究」「出版」「展示」として四段階の「流れ」があることを紹介した。上記のとおり、Burns¹⁵⁾ とそれを翻訳して紹介した木場¹⁴⁾ は博物館の主要機能を「知識の流れ」と捉え、図上では円の中心から外へむかう流れで表現したといえる。この表現方法はこの後に紹介する後世の理論にも度々現れる。

4-3.「流れ」と「相互作用」と捉えた鶴田 (1956)

鶴田総一郎氏 (1917-1992) は動物生態学を学び、1945 年に文部省の科学教育局の科学官補として現在の国立科学博物館の運営管理などを職務として行うところから博物館との関わりが始まった²¹⁾。前述の木場と同じ職場で働き討議を重ねた。博物館法の改正で学芸員の取得に国家試験の規定がもうけられ、その科目である博物館学に対応できる入門書として 1956 年に『博物館学総論』を出版した。その鶴田⁵⁾ によってはじめて、博

博物館の主要機能を抽出して図示しただけでなく、博物館の主要機能同士の関係を「流れ」と「相互作用」の両方で捉えている点が、木場¹⁴⁾の議論と比較して画期的な点である(図3)。例えば、鶴田⁵⁾では「収集」「整理保管」「調査研究」「教育普及」が主体となる流れであり、「教育普及を終局としている」と表現している。これだけでなく、それぞれの主要機能同士の間に相関し合うものがあり、これを「小循環」と呼んだ。鶴田は4つの主要機能のうち1つが欠けた3つの相関を「中循環」と呼び、小循環と中循環が合わさった複雑な関係を「複合循環」と呼んだ。そして、4つの主要機能はいずれも等価であるとしている。

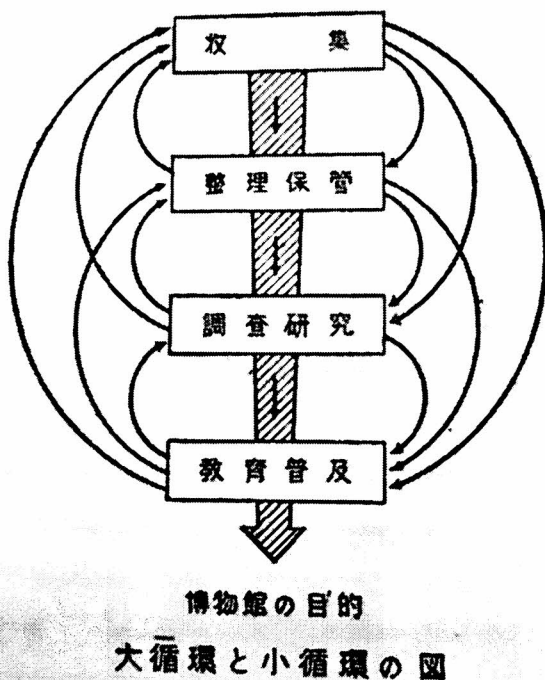


図3 博物館機能の概念図(鶴田⁵⁾より転載)。

4-4. 再び「流れ」と捉えた1970年代後半

1970年代後半は博物館学の教科書が多数刊行され、複数の博物館人が、博物館主要機能の結合について意見を述べ、図を提示するなど活発な議論が生まれた時代だった。『博物館学講座』シリーズのなかでは、博物館学を専門とする加藤有次氏と地質学と博物館学を専門とする新井重三氏が図入りで論じた(表1)。図はないがテキストで部分的に述べたのは、古生物学と博物館学を専門とする大阪市立自然史博物館の千地万造氏、そしてほぼ同じころ上記シリーズとは別に北海道立近代美術館を経て明治大学で博物館学を教えた倉田公裕氏もまた図入りで博物館の主要機能同士の関係を「流れ」として捉えた(表1)。

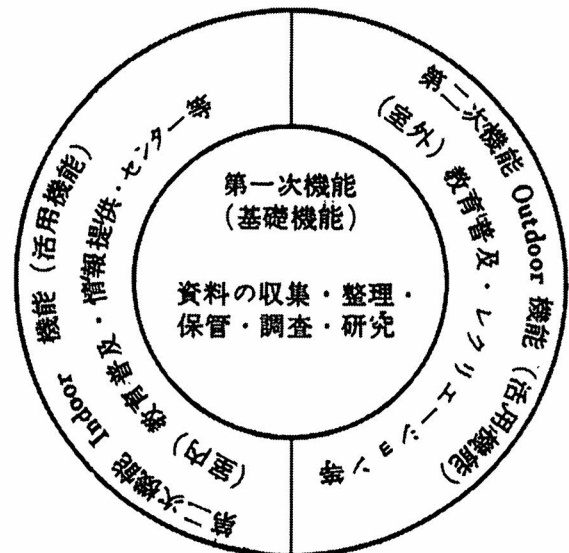


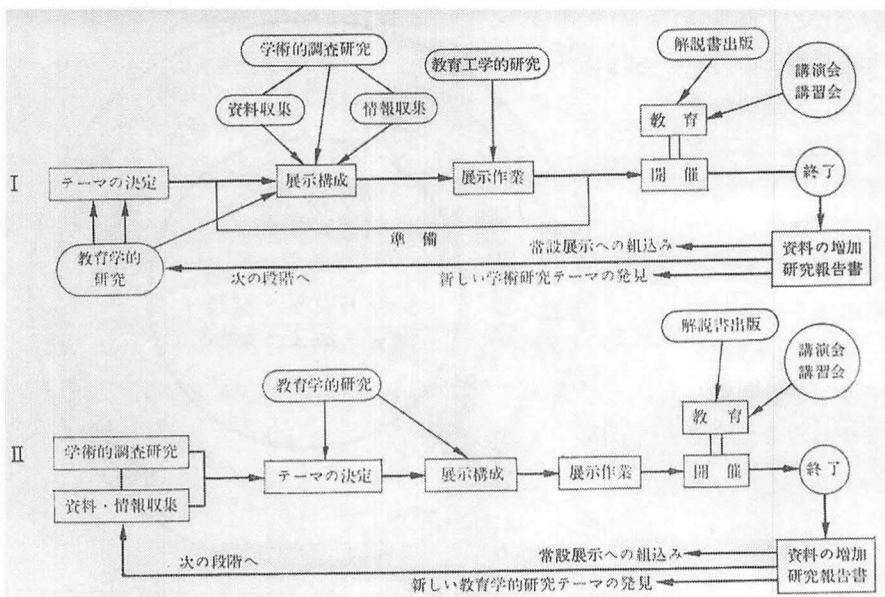
図4 博物館機能の構成(加藤^{6,23,45)}より転載)。

加藤^{6,22,23)}は博物館の主要機能を「一次機能」と「二次機能」に分けた(図4)。「一次機能」とは資料収集と研究であり、博物館の基礎機能と捉えた。「二次機能」は普及教育であり博物館の活用機能と捉え、さらに「二次機能」をインドア機能とアウトドア機能という博物館の中か屋外か、活動を行う場所によって細分した²²⁾。一次機能を受けて二次機能でいかに資料を活用するか考える⁶⁾としているため、加藤の図は博物館の主要機能を「流れ」として捉えたと考えてよいだろう。

千地¹¹⁾では調査・研究成果の展示など交流活動への活用という視点で博物館主要機能の「流れ」が述べられている。具体的には「研究成果が一方では博物館資料の量的な増加と質の向上となってあらわれ、また、展示を通じて公表され、教育効果を高めるところに、博物館のもつ機能の特色がある」と博物館主要機能同士の結合の意義を強調している(図5)。

4-5. 「相互作用」と捉えた1990年代

1970年代に多かった博物館の主要機能を「流れ」として捉えるものから、より複雑な「相互作用」として捉えるものが1990年代から見られるようになってきた。「相互作用」という考え方の原点は定かではなく、時系列で考えてもっとも初期の考えは鶴田⁵⁾であるが、「流れ」と「相互作用」を図示したのみで具体例は示されなかった。金山²⁴⁾では、鶴田の図を転載しつつ「これまでの博物館機能論では、博物館を教育機関とみなすことを前提にして、教育普及を最終目標としたが、生涯学習という観点からいえば、4者の機能関係はすべて対等で相互に循環関係をもつことになる」と「相互作用」につ

図5 博物館機能の概念図(千地¹¹⁾より転載)。

いて述べている。

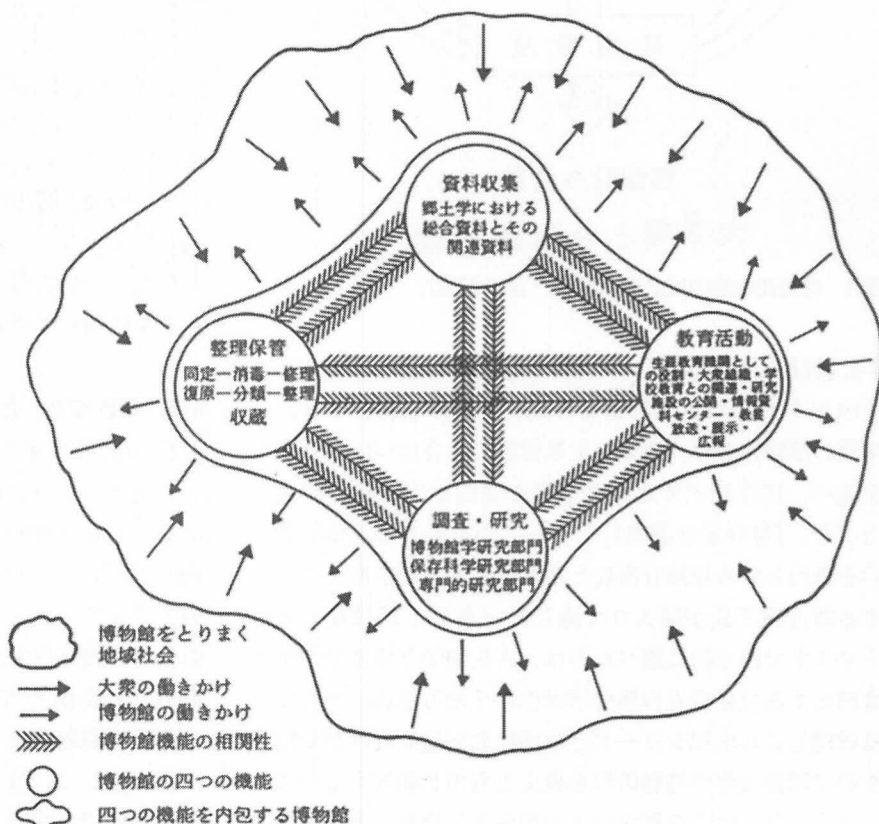
時系列で考えて次の「相互作用」の萌芽は博物館とそのほかの機関との機能面の比較の中で生まれ1970年代に図示され、1990年代後半に本格的に現れた。加藤⁶⁾は、博物館の主要機能同士の関係に関する別の図も併記している(図6)。先述のように加藤⁶⁾は、博物館の主要機能同士の関係を先に図4で示された「一次機能」「二次機能」という語を使って「流れ」の関係として捉えた。同時に、博物館という施設がもつ機能を議論するなかで、それらが相互に機能することが博物館としての特徴であると主張した。

博物館主要機能の関係を「相互作用」と捉える加藤の考えは大堀^{7,25)}に継承された(図7)。大堀は加藤のいう博物館の主要機能同士が相互作用し、その1つでも活動不能になると博物館としての全機能が喪失するという考えを踏まえ、博物館主要機能を「研究」「収集」「保管」「展示教育」の4つに分け「研究」をその中心に置いている^{7,25)}。1997年の図と比べて1999年の図では、博物館の外部の繋がりとして

地域社会に利用者が要素として追加されている。

もう1つの異なる「相互作用」の捉え方は千地²⁶⁾によって示された(図8)。千地は博物館の主要機能を「調査研究」「コレクションの形成(図では資料)」「展示」「普及教育」「情報提供」の5つとし、「これらが個別に機能するのではなく、互に関連性を持ち、そのすべてに市民の参加をえて、有機的に機能する必要がある」と述べている。「調査研究」することで情報の蓄積やコレクションが形成されることで「資料」の機能が充実する。また「調

査研究」することで講演会や出版で「普及活動」機能へと繋がり、同様に「展示」へと繋がる。逆に「普及活動」とおして市民の声を聞いたり、市民参加の「研究」が進む。「展示」にともなって調査計画が作られたり、市民の参加が生まれ「研究」がすすむ。「展示」によって広報や解説といった「普及活動」が生まれ、「普及活動」

図6 博物館機能の構成(加藤^{6,22,23)}より転載)。もとは『秋田県立総合博物館設立構想』より。

から「展示」に対する市民の要求を受けられる。テキストとしては述べていないが、このようなことを図から読み取ることができる。千地²⁶⁾の考え方は滋賀県琵琶湖博物館の開館の際も適用されている²⁷⁾。興味深いことは、千地は1978年には博物館の主要機能同士を「流れ」として捉えていたが、ここで「相互作用」に捉え方が変わっている点だ。これは「相互作用」として図示できる実践事例が増えた可能性があると考えられる。

5. 考察

最後に、博物館主要機能同士が関わり合っているという記述がいつから始まったのか、博物館主要機能同士の関係性をどのように捉えるか、その理論の歴史を振り返り、博物館主要機能同士の関係をどのように捉えれば、博物館主要機能同士を結合させ、より効果的に博物館活動を展開できるのか考察する。

5-1. 博物館主要機能の理論史

博物館主要機能は関わり合っているという記述はいつから始まったのか？という疑問は日本だけの博物館学史では解き明かせないことがわかった。すくなくともBurnsの述べた「博物館の機能は独立した自給自足の機構ではなく、大きなガイドプログラムの中の単位である」という考えが木場によって和訳されたことで、戦後の日本において博物館主要機能は個々に独立するものではなく関わり合っているという考え方が広まっていったと考えられる。しかし、Burnsで示された考え方のルーツはもっと深い所にあり、原典を辿ることで、資料を保存して利活用、発信するという博物館の機能を「流れ」として捉えた130年前のGoode(1895)まで遡ることができた。Goodeは「保存」「研究」や「展示」について述べており、Burns(1940)で図示される要素がその半世紀前にはほとんど揃っていたことがわかる。今後、アメリカをはじめ諸国の博物館学史を調べる中でさらに深いルーツについて明らかになっていく可能性がある(注釈1)。

時代ごとに博物館主要機能同士の関係性の理論史は1世紀近く遡ることができ、次のようにまとめられる。まず、Burnesや木場による博物館の主要機能同士は独立ではなく関係しているという考えを萌芽とみることができる。博物館の主要機能の関係性をはっきりと示したのは、鶴田総一郎の『博物館学総論』(1956年)が日本では初めてのことであり、その中で博物館の主要機能同士を「相互作用」と「流れ」として捉える考え方が示された。その後、1970年代には「流れ」が強調されるようになり、

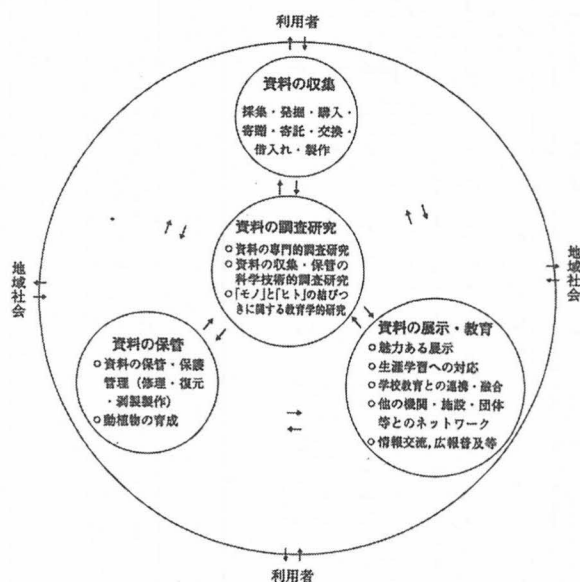
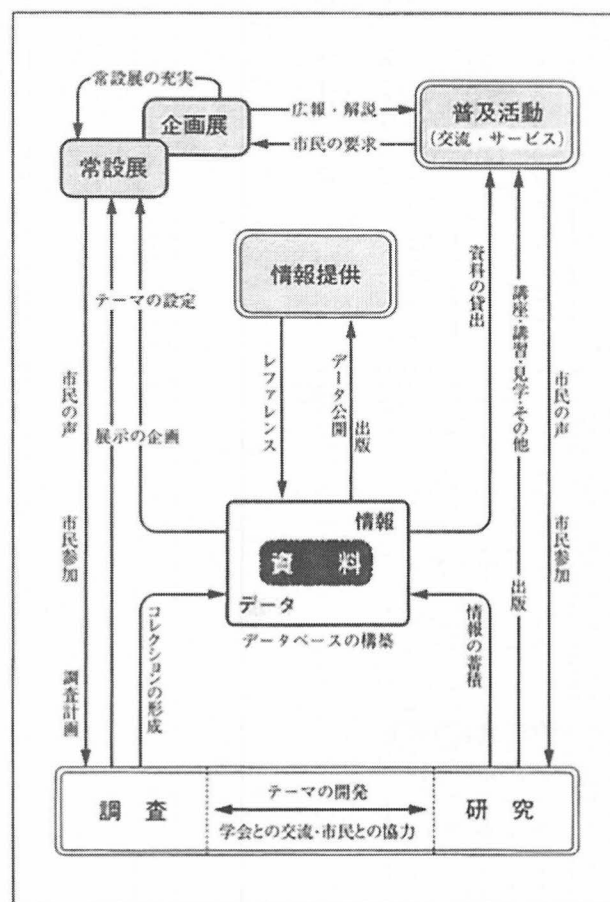


図7 博物館機能の概念図 (大堀²⁵⁾より転載)。



博物館機能の相互関係

図8 博物館機能の概念図 (千地²⁶⁾より転載)。

1990年代からは「相互作用」が強調されるようになった。

5-2. 博物館主要機能同士の結合を「相互作用」と捉えるメリット

博物館の主要機能同士の関係を「流れ」と「相互作用」

の2つの型で認識したが、どちらがより効果的な博物館活動を展開する上で良いのか考察する。「相互作用」は1990年代後半から主流となった博物館の主要機能同士の関係の捉え方である。この「相互作用」で博物館の主要機能を捉えようという考え方は、「あらゆる博物館主要機能同士の結合を想定して活動するため」博物館活動を展開する実践の場において強力に機能する。

ここで博物館主要機能を結合させた事例を紹介しつつ、上記の「相互作用」のメリットを説明したい。田中らは2017年から2025年にかけて行なった、大阪市立自然史博物館に収蔵されている縄文時代のヒゲクジラ化石の研究、交流活動、資料活動をまとめ、博物館主要機能に関する2つの議論をまとめた⁴⁾。1つ目の議論が、博物館主要機能同士の結合は思いがけないところにあるという指摘であった。

具体的には特別展のために標本を展示したことで、これまで一堂に観察することができなかった大きなクジラ化石標本の全貌を知ることができ、論文用の写真撮影や計測を行うことで論文出版に繋がった²⁸⁾。さらに、収蔵庫から展示室へ標本を出したことによって、収蔵庫内部にワーキングスペースができ、整理が促進された。その結果、長らく忘れられていた標本の再発見につながり、それが日本初の先史時代のセミクジラ属の記録であることが明らかになり、論文出版につながった²⁹⁾。これらの事例は「交流活動」から「研究」への展開であり、博物館主要機能同士の結合としては事例が少ない組み合わせであるとされている³⁰⁾。このように博物館主要機能同士の関係を「相互作用」と捉えることで「思いがけない所に博物館主要機能同士の結合はある」という意識が働くことで、機能同士の結合の「機会を逃さない」確率が高まると考える。

5-3. 博物館主要機能同士の関係を「流れ」と捉えるメリット

博物館主要機能同士の関係を「相互作用」と捉えると上記のようなメリットがあるが、「流れ」と捉えるとメリットはないのだろうか？ 博物館主要機能同士の関係を「流れ」と捉える考え方は、「相互作用」と捉える考え方に負けて衰退していった考え方なのだろうか？ 筆者はそうではなく、どちらにも異なるメリットがあるため、2つの捉え方を兼備すると良いと考えている。

埋もれた膨大な資料の蓄積を、現在と将来の社会において「活用」できる資源として捉える「文化資源」という考え方があるが^{31,32)}、「流れ」と捉えることで博物館の資料を活用しやすくなるメリットがあると考えている。田中・湯浅ら⁴⁾は文化資源の考え方を自然史博物館の状

況に当てはめ、「標本」と研究によって創出された「知的情報」をあわせて「標本に関する知的リソース(資源)」、またより広くだれもが用いることができるように作られた普及のための文章や展示パネルをあわせて「標本に関する知的アセット(資産)」と定義した。この「標本」から「標本に関する知的リソース」そして「標本に関する知的アセット」への展開は、それぞれ「資料活動」「研究」「交流活動」によって促進される。

波及するメッセージやコンテンツを作る手段の一つが「標本に関する知的アセット」への展開であり、「標本に関する知的アセット」は使うほどに価値が高まっていく。これらのことから、「資料活動」「研究」「交流活動」という博物館の主要機能を順番に結合させて「標本に関する知的アセット」へと展開させる「流れ」を意識することによって、博物館の波及力を高めることに繋がると考えられる。

6. 結論

博物館主要機能同士の結合を「相互作用」と「流れ」のどちらで捉えたとしても、博物館主要機能を結合させることで博物館の魅力や波及力を高めるメリットが存在する。「流れ」と捉えれば博物館主要機能同士の結合を生み出し「標本に関する知的アセット」づくりを目指すことで博物館の波及力を高め、「相互作用」と捉えれば博物館主要機能同士の結合のチャンスを増やし魅力を高めるメリットにつながる。博物館主要機能同士の関係の「相互作用」と「流れ」の両方と捉えることが、メリットを最大にすることに繋がる。

博物館主要機能の関係については、博物館概論や博物館機能論の各論で簡潔に語られることがあったが、本研究でおそらくはじめて博物館主要機能同士の関係について述べた理論を19世紀の文献にまで遡って、分類、比較し博物館主要機能の理論史を整理した。また、金山(2003)で引用されているもののしばらく影が薄くなっていた鶴田(1956)による博物館主要機能同士の関係を「流れ」と「相互作用」の両方で捉える考え方は、博物館における実践に際して適していると指摘した。70年経とうという理論であっても、本質を捉えており、現代の我々が生き働く上で有益な事柄を古典から学ぶこともある。

7. 今後の課題と展望

博物館だけでなく学芸員のありかたは多様性であるた

め、一般化しようとしても必ず適さない博物館はあるだろう。時代の流れも軽視できない。博物館機能同士の理論は決して1つではない。博物館機能の重点の置き方や、立場を変えて見ると、様々な理論が成立するのが自然である¹¹⁾。筆者自身、博物館の主要機能の意義を今一度見直し、様々な方法で主要機能同士を結合させ、より効果的な働きを生み出すことを目指して実践を積み重ね、理論の一つを構築したいと考えている。

脚注

- 1) 鶴田は木場の研究を継承したと考えられているので³³⁾、博物館の主要機能の関係性に関する考察は鶴田、木場、Burns、Goode という影響の流れがあった可能性がある。

引用文献

- 1) 金山喜昭 『日本の博物館史』慶友社, 2001, p.424.
- 2) 栗原祐司, 林奈央, 井上由佳, 青木豊 『ユネスコと博物館』雄山閣, 2019, p.242.
- 3) 日本博物館協会, ICOM 日本委員会. ユネスコ (UNESCO) 『「ミュージアムとコレクションの保存活用・その多様性と社会における役割に関する勧告 (2015 年採択)」の実施状況報告書 (2019 年) (日本語版)』2020, p.80.
- 4) 田中嘉寛, 湯浅万紀子 「博物館における研究、資料収集保管、教育普及の有機的連携が示す可能性—大阪市立自然史博物館における7年間の実践として—」『博物館教育学研究』4号, 2025, pp.1-19.
- 5) 鶴田総一郎 「博物館学総論」伊藤寿朗編『博物館基本文献集』大空社, 1956, pp.1-117.
- 6) 加藤有次 『博物館学序論』雄山閣出版, 1977, p.253.
- 7) 大堀哲 「博物館概論」大堀哲編『博物館学教程』東京堂出版, 1997, pp.9-38.
- 8) 栗原祐司 『基礎から学ぶ博物館法規』同成社, 2022, p.245.
- 9) 鷹野光行 「博物館の機能再考」お茶の水女子大学社会教育研究会編『人間の発達と社会教育学の課題』学文社, 1999, pp.24-39.
- 10) 橘昌信 「博物館における研究活動」網干善教編『博物館学概説』佛教大学通信教育部, 1985, pp.93-106.
- 11) 千地万造 「博物館における調査・研究」千地万造編『博物館学講座5巻 調査・研究と資料の収集』雄山閣出版, 1978, pp.3-51.
- 12) 倉田公裕, 矢島國雄 『新編博物館学』東京堂出版, 1997, p.408.
- 13) 精選版 日本国語大辞典「跛行」2025年4月9日閲覧. <https://kotobank.jp/word/跛行-600718#w-600718>
- 14) 木場一夫 「新しい博物館—その機能と教育活動—」伊藤寿朗編『博物館基本文献集 第12巻』大空社, 1946(1991), pp.1-218.
- 15) Burns NJ *Field manual for museums*. United States Government Printing Office, 1940. p.426.
- 16) 棚橋源太郎 「目に訴へる教育機関」伊藤寿朗編『博物館基本文献集 第1巻』大空社, 1930(1990), pp.1-449.
- 17) Lewis RH *Museum curatorship in the National Park Service 1904-1982*. Department of the Interior National Park Service Curator Service Division, 1993, p.390.
- 18) 倉田公裕 『博物館学』東京堂出版, 1979, p.280.
- 19) Goode GB *The principles of museum administration*. Smithsonian libraries, 1895, p.73.
- 20) 山本哲也 「木場一夫」青木豊, 矢島國男編『博物館学人物史 (上)』雄山閣, 2010, pp.275-282.
- 21) 大貫英明 「鶴田総一郎」青木豊, 矢島國男編『博物館学人物史 (下)』雄山閣, 2012, pp.231-240.
- 22) 加藤有次 「博物館の機能」加藤有次, 椎名仙卓編『博物館ハンドブック』雄山閣, 1997, pp.37-44.
- 23) 加藤有次 「博物館機能論」加藤有次他編『博物館機能論』雄山閣, 2000, pp.3-24.
- 24) 金山喜昭 『博物館学入門 地域博物館学の提唱』慶友社, 2003, p.251.
- 25) 大堀哲 「博物館経営とはなにか」大堀哲他編『博物館経営論』樹村房, 1999, pp.1-20.
- 26) 千地万造 『自然史博物館—人と自然の共生をめざして—』八坂書房, 1998, p.254.
- 27) 滋賀県立琵琶湖博物館 『琵琶湖博物館 開館までのあゆみ』滋賀県立琵琶湖博物館, 1997, p.254.
- 28) Tanaka Y, Taruno H "Remains of a fin whale from Osaka, Japan, and comparison of baleen whale cases in the past and present of Osaka Bay (Seto Inland Sea)", *Mammal Study*, 49(3), 2024, pp.217-228.
- 29) Tanaka Y, Taruno H "First record of a right whale fossil from the pre-historic period of Japan" *Aquatic Mammals*, 48(4), 2022, pp.255-261.
- 30) 国立歴史民俗博物館 『歴博のめざすもの』国立歴史民俗博物館, 2007, p.19.
- 31) 木下直之 「文化資源学の現状と課題」『文化経済学』

- 4 巻 2 号, 2004, pp. 5-13.
- 32) 伊藤裕夫 「「文化資源マネジメント」という観点について」『地域生活学研究』1 巻, 2010, pp. 67-74.
- 33) 栗山究 「日本における「機能主義博物館論」の一展開 伊藤寿朗博物館論の視点から(前編)」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』15 巻 1 号, 2007, pp. 137-147.
- 34) 千地万造 「研究機関としての自然史科学博物館」『博物館研究』37 巻 6-7 号, 1964, pp. 164-167.
- 35) 加藤有次 「わが国の博物館の概観と設立状況」加藤有次編『博物館学講座 3 巻 日本の博物館の現状と課題』雄山閣, 1980, pp. 3-55.
- 36) 後藤和民 「博物館の運営と職員」伊藤寿朗, 森田恒之編『博物館概論』学苑社, 1978, pp. 364-392.
- 37) 新井重三 「博物館機能の有機的関連」新井重三 編『博物館学講座 1 博物館学総論』雄山閣, 1979, pp. 91-93.
- 38) 小原巖 「博物館資料論」大堀哲編『博物館教程』東京堂出版, 1997, pp. 95-97.
- 39) 石田武久 「博物館資料調査研究法」加藤有次他編『新版・博物館学講座』雄山閣, 2000, pp. 167-171.
- 40) 原田雄三 「資料の調査・研究」全国大学博物館学講座協議会西日本部会編『概説博物館学』芙蓉書房出版, 2002, pp. 19-20.
- 41) 布谷知夫 『利用者の視点に立った博物館の理念と活動様式の研究』総合研究大学院大学, 2004, p. 182.
- 42) 布谷知夫 『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』雄山閣, 2005, p. 234.
- 43) 田中嘉寛 「クジラを研究して発信する博物館」『勇魚』70 巻, 2019, pp. 13-18.
- 44) 田中嘉寛, 長野あかね, 百々千鶴, 安藤達郎 「北海道で近年新種になった鯨類化石についてー文化資産をもちいて好循環を生みだすー」『化石研究会会誌』57 巻 1/2 号, 2024, pp. 37-43.
- 45) 加藤有次 「博物館学とその展開」加藤有次編『博物館ハンドブック』雄山閣, 1997, pp. 11-19.